

かなとも思っている。何故なら感情が揺らいだり、悲しみを享受し、共に悩み葛藤することはあの場面では自然なあり方だったと思うからだ。その自然さは他のカメラマンには撮ることのできない画が撮れる、私だけの立ち位置であったと思う。

私はカメラマンであったが、撮影中自分を置き去りにし、切り分けることはできなかった。レンズを覗いていたのは、いつも土井亨という日本人カメラマンである私だった。だから記録された映像・写真には、客観的なワークの記録ではなく、レンズを通してある日本人カメラマンが感じとった、痛みや悲しみ、罪悪感そして希望や安心の感情がちりばめられている。

南京の感想

土井亨（立命館大学応用人間科学研究科）

我是以摄像师的身份参加此次活动的。因为与活动参加者的立场有所不同，所以看到的景色和感受到的东西可能和参加者有很大差别。从活动开始到结束，我心里一直纠结着自己的两个身份。一个是日本人，还有一个就是摄像师的身份。

在工作中作为一名摄像师，我很注意不影响活动本身的进行。我知道戏剧疗法非常重视过程，但在工作坊进行过程中必须摄像。我很担心自己的摄像机会影响活动的正常进行，或者对意识到镜头的参加者可能会产生某些作用。因此，我摸索了一些使不属于参加者的自己也能够以不引人注目的方式融入团体的方法。比如尽量在大家站起来的时候也站着摄像，大家坐着的时候也坐下来。

随着工作坊的深入展开，作为一名日本人，在与工作坊参加者所感受到的悲伤、痛苦、罪恶感产生共感、共鸣的同时，我的心中也涌出了很多情感。这些情感应该和工作坊参加者感受到的东西相似。但因为我所处位置的不同，对方的悲伤和痛苦都是通过镜头传达到我心里的。而另外，作为摄影师的痛苦也涌出了地层。我必须将镜头对准向大家开放自己、深陷伤痛的人，这令我非常痛苦。而对对方的悲伤产生的共鸣更加沉重地压过来。

常常做摄像工作的话，就会强烈意识到摄像的伤害性。这不仅仅是对不喜欢面对镜头的人而言，我发现某种意义上，镜头对准本身就存在伤害性。关于镜头

的伤害性，有一位我尊敬的摄影师朋友曾这样对我说：“镜头就是枪。”和镜头所对准的人之间建立信赖关系非常重要。即能证明就算是用枪对准也毫无恶意的信赖关系。而我也更加明白了，建立这样的信赖关系绝对不是一件容易的事情。

而自己是带有伤害性的摄影师，这一点从头到尾一直在我心中纠结着。在工作坊里每个人都卸下自己伪装向大家开放自我的过程中，却只有我具有伤害性。举着镜头这把枪，这令我异常痛苦，说实话有好几次我都想放下摄像机。

另外，我也感受到了作为日本人的矛盾。特别是第二天，我强烈意识到自己的日本人身份，并且是加害国。听幸存者证言的时候，我的镜头一直对着他。最后轮到我发表感想的时候，我下意识说出来的是：“我是土生土长的日本人。”说完这句话我的眼泪就刷得涌了出来。大脑还等不及明白是悲伤或是痛苦，眼泪早已流下，连思考自己流泪的理由的时间都没有。

慰灵碑前的场面给我留下了深刻印象。日方成员以各自不同的形式全心进行慰灵或者谢罪的时候，只有我一个人拿着摄像机在拍摄。把镜头对准哭倒了的大家时，我一直在想：“我真是卑鄙的家伙，这样的场面下还将摄像机对准陷入悲伤的人…”虽然看不到举着摄像机的自己，但自己的身影和扛着枪的日本兵的身影完全重合了。一名慰灵碑前举起枪的日本人士兵。眼泪止不住地流了下来，但是为什么会这么悲伤，当时一点都没想明白，甚至现在也还没整理清楚。不知道过了多久，我觉得摄像内容已经差不多了。画面都已拍下来，也可以了吧…想到这里，身体马上动起来，我放下摄像机，和大家一起跪了下来。而且作为一名日本人谢了罪，那些话我一直想说但没能说出来。

最后的晚上，日方的一位参加者跟我说：“我还是第一次见到流着眼泪的摄影师呢。”我自己也觉得很奇怪。我在很多场合见过很多摄影师，但的确也没见过摄影师流泪。如果摄影师是以客观记录事物本身作为本职工作的话，那我就是失职的摄影师。我过于受自己感情的牵制，而且还到了无法控制的地步。所以作为接受拍摄任务的人，我的工作做得非常不到位。对此我感到非常抱歉。但另一方面，我认为就算是失职也无妨。因为当时不知不觉涌出感情，或感受痛苦，或一起烦恼矛盾，是非常自然的事情。我正是站在这个位置，才能拍摄到别的摄影师拍不到的这些自然的地方。

我作为一名摄影师，却没能在摄影过程中将自己排除在外。通过镜头窥视着的，一直是叫做土井亨的日本籍摄影师的我。所以我拍下的录像和照片并非工作

坊の客観記録、而是一名日本籍摄影师通过镜头感受到的痛苦与悲伤、罪恶感以及一点希望和释怀。

全体を振り返っての感想

西 順子

日本に帰国して、まず思ったことは、参加して本当によかったなということ。自宅に帰ってすぐ、興奮する気持ちで、夫や子どもたちに、南京で経験したことを話した。ぜひ、夫や子どもたちにも体験してもらいたいと思った。

日本に戻ったとき、中国に行く前より、しっかりと地に足を着けているという感覚になっていることに気づいた。どしどししているというか、安定感があった。しかし、感じやすい自分にも気づいた。中国の話をすると、涙がでてくるような感覚と共に感情がでてくる。感じやすい自分だけけど、でも安定して落ち着いているので、とても楽でいられる。この安定感は、日本人であるというアイデンティティをもてたことが大きいのではないかと思う。この感覚は、日本を出て南京を訪問することで、もたらされたものである。

今回の訪問を通して、私は今まで、「日本人である」というアイデンティティはもっていなかったということに気づいた。日本で生まれ、日本で育ち、海外旅行の経験はあるものの、日本人であることが当たり前すぎて、日本人であることを自覚することがなかった。しかし、南京記念館で、市民の人々がたくさん見学するなかで共に見学するという体験、そして中国の参加者と共にドラマやアートなどを通して、戦争の傷跡が肌で伝わり、感じるという体験をするなかで、自分が日本人であることと向き合うこととなった。南京の地で、人々の悲しみ、怒り、恥の意識を知り、感じるなかで、自分が日本人であることを相対化して捉えるようになっていた。

私が出た「日本人である」というアイデンティティは、私は日本人であることに責任をもちたいという感覚である。過去に犯した戦争の加害の罪は、過去